



詞にこもる思いを歌に昇華する吟詠家

いしづ 石津 さつ子 さん



▲吟詠に合わせ剣舞を披露する石津さん

PROFILE

いしづ さつ子 (西側区・75)

吟詠家。吟号は石津範優。

日本国民吟詠道中遠吟詠会会長。58歳から剣舞にも挑戦し18年間たしなむ。

歌から吟詠へ

日本の伝統芸道の一つである「吟詠」。この吟詠の世界に身を置く石津さつ子さんは、7月に開催された「全国吟詠コンクール中部地区大会」で第5位となり、2回目の全国大会出場を決めた。

小さな頃から歌が得意で、学校行事でもたびたび独唱を任されていたという石津さん。高校2年生の時、父親に吟詠を勧められたことがきっかけで吟詠歴は約60年。「父に教わりながら毎晩練習していた。昔は防音室なんてなかったから、一番音が漏れない米倉が練習場所だった」となつかしそうに振り返った。

指導者としての喜び

石津さんはこの8月、所属して39年となる「日本国民吟詠道中遠吟詠会」の会長に就任した。会長になると、大会では審査員側に回るため、石津さんが大会に出場できるのは今回が最後だ。「寂しいけれど、一区切りついて少しほっとする。悔いの残らないように吟じきって、これからは指導者としての力を一層伸ばし

たい」と語る。

現在、同会には28人の会員がいる。「熱意をもって指導した分だけ、意欲的に練習に励んでくれる弟子ばかりで指導者冥利に尽きる。自分が歩んできた道を受け継いでくれる人がいるのが誇らしい。弟子の上達を実感できると自分のことのように本当にうれい」とほほ笑んだ。

吟じ手ごとの味

吟詠は漢詩や和歌を独特の節回しで歌う。石津さんは特に漢詩の吟詠を好んでいる。「たった二十数文字の中に込められた思い。これにどれだけ共感し、どれだけ感情を入れて伝えるかが吟詠の肝であり、吟じ手ごとの味が出る魅力的なところ」と話す。

最近吟詠をする人が減ってきているのが石津さんの悩み。「吟詠はもとの詞を「素読100回」というように熟読することや詞を暗記することが基本。脳の活性化にもよいので、ぜひ、いろいろな人に参加してほしい」と勧める。石津さんの吟詠を愛する気持ちや伝わり、魅力が多くの人に広まってほしい。